



畫伯は、くだものがお好きである。その好物を前にして描いてゐる時ほど、氣のはいる時はない。ごらんなさい。すつかり打ち込んで描いてゐる。一派の人々は之れを寫生とよぶだらうが、それどころか、畫伯は、つばを呑み込みながら描いてゐる。たゞる實感を假想して。が、遂にたべられない。天才は苦しい。

(倉橋生)